

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590022

研究課題名（和文）援助大競争時代における途上国の選択：南南協力はODA後の国際協力枠組になりうるか

研究課題名（英文）International Contributions from the South as Post ODA

研究代表者

小林 誉明（KOBAYASHI, TAKAAKI）

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・准教授

研究者番号：00384165

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：明らかになったことは、途上国において難民受入を可能としているのは実は、ホストコミュニティ支援という形で先進国から供与されているODAであり、南南協力とODAとが共存するという姿であった。アフリカやアジアの複数の国々における現地調査を通じて、難民受入国の政府やホストコミュニティが抱える難民を受け入れることの「合理性」を描くことができた。その様子は「ODAは難民を救えるか？」という論考として、パブリッシュされたものである。

研究成果の概要（英文）：Tough the comparative analysis among several cases in developing countries, we found developing counties including emerging counties who located near the conflict counties such as Jordan, Turkey, Lebanon are providing much effort to contribute international public goods and the part of the financial resources are ODA from the developed countries. This fact indicate traditional ODA from DAC donors and South South Cooperation from developing countries are not excluded but muturaly complement.

研究分野：国際政治経済学

キーワード：ODA 難民 南南協力 新興国

1. 研究開始当初の背景

近年急速に台頭し始めた新興国は、国際開発援助の領域においても多大なインパクトをもたらしている。新興国は「支援する側も途上国である」という「南南協力」のレトリックの下、ODA に体现される伝統的な南北協力のあり方とは全く異なる援助（商業的見返りを求めるなど）を展開しているため、この動きは国際社会において長年構築・共有されてきた国際協力のルールや実践への挑戦として先進国ドナーから受け止められ、南南協力を既存の ODA の枠組へ取り込む方向での模索が続いている。南南協力の実績が益々伸展するなかで、その異質性を明らかにしようとする研究（伝統ドナー側による）やその意義を論じる研究（新興国ドナー側による）は量産されているが、「受け手の視点」に立って南南協力の効果を実証した研究は皆無であった。その先鞭をつけたのが申請者らによる *World Development* 誌掲載の研究（2013 年度国際開発学会奨励賞受賞が決定）である。同研究は、カンボジアを事例としたが、文脈の異なる複数の受入れ国において比較検証を行う余地を残していると考えられる。更に、こうした受け手と想われてきた国々も実は国際協力の主要なアクターになっているという事実も看過されてきた。従来の ODA の研究では見逃してきた途上国の側からの協力の実態とその構造を明らかにする必要性が高まりつつあるなかで本研究がスタートした。

2. 研究の目的

本研究は、国際協力の新たなトレンドとして着目される「南南協力」が、その「受け手」にどのようなインパクトを与えうるかを解明することを目的とした研究である。新興国によって展開される南南協力の実践は、南北協力を前提として構成されてきた既往の国際協力のゲームのルールに根本的な改変を迫るものであり、新旧の援助レジーム間の「大競争」様相を呈してきている。ところがその実、南南協力の規範や原理とは何かは必ずしも明確ではなく、そこに国際協力の新たなモデルが見いだしうるか等、解くべき問いが無数に広がっている。何よりも、援助の受け手たる途上国も含めたゲームにおいて、どのようにルールの改変をもたらしているかは未知である。既往の体制の下では提供されず、南南協力によってこそ提供される価値があるのか、あるとすればそれは何なのか、援助の「受け手」の当事者の証言を元に浮き彫りにすることを目指した。

3. 研究の方法

まず新興ドナーおよび南南協力について出版されている各種文献の収集および読み込みから開始した。特に調査対象国たる援助受入国が援助を必要とする経緯や国内事情、

資源賦存、政治経済状況等につき特段の把握を行うよう注力をして分類を行った。国内でのリソースパーソン等へのインタビューを経て、以下のとおり三種類の分析対象を特定した。(1) 内戦や軍事政権等の事情で ODA の真空地帯になっていたがその後増大に向かっている国としてルワンダ、(2) 新興ドナーとしての二大大国（中国およびインド）に挟まれた特殊ケースとしてのネパール、(3) 経済発展の結果として ODA 卒業に向かいつつある国としてトルコおよびヨルダン、という分け方である。

これらを共同研究者と分担の上で現地調査を実施した。それぞれの現地調査においては 1 週間程度の滞在により、ホスト国政府の援助受入窓口たる外務省、予算当局およびライン省庁等へのインタビューを行った。

4. 研究成果

2015 年度には、本研究がテーマとしている社会的事象そのものに大きな動きがあったため、研究計画の修正の必要が生じた。その内の一つは、2015 年 4 月および 5 月に発生したネパール大地震である。この地震は、新興国による援助のかっこうのプレゼンテーションの場になったが、新興国による緊急援助のパフォーマンスやビヘイビアを知るための絶好の調査の機会ともなった。そのため、調査の対象に加えるという変更が生じた。また、2011 年から発生しているシリア内戦に伴う中東の危機、特にイスラム国の急速な台頭によって発生したシリア難民は、世界の焦点の解決すべき課題となっている。ドイツが難民の受入を決めたが、シリア難民を最も大量に受け入れているのは実は近隣の中東の途上国である。難民受入はこれまでいわゆる「対外援助」としては認識されてこなかったが、本研究が扱う南南協力という新しい現象の発露そのものともいえる。当初は、ここまでの規模になるとは想定されていなかったシリアの近隣国途上国によって実施されつつあるホストコミュニティへの受け入れという形での難民受入につき、あらたに研究対象として追加したことによって、1 年間の延長を申請したものである。当初の予定からは遅れたことにはなるものの、むしろ意欲的な理由によるものである。

調査を通じて、南南協力の当事国とが互いにどのような関係性のなかで援助を活用して繋がっているか、その紐帯の太さの違いが明らかになってきた。特に (1) についてはレシピエント側が新興ドナーを梃子に伝統ドナーをコントロールするという現象が、(2) のケースについてはレシピエントが伝統ドナーを梃子に新興ドナーをコントロールするという現象が確認され、(3) については、自らが途上国でありながら難民支援という形で事実上の南北協力における ODA と同様の南南支援をやっている事実が明らかとなった。

図 1 に示したとおり難民の受け入れをやっている国のほとんどが難民発生国の近隣に位置する発展途上国であり、ODA 供与国である先進国は、難民受入という意味では限られた数の貢献にとどまっているという現状が展開されている。すなわち難民受入政策こそが、現代における途上国が実施している「南南協力」の最も代表的な形態と捉えるこ

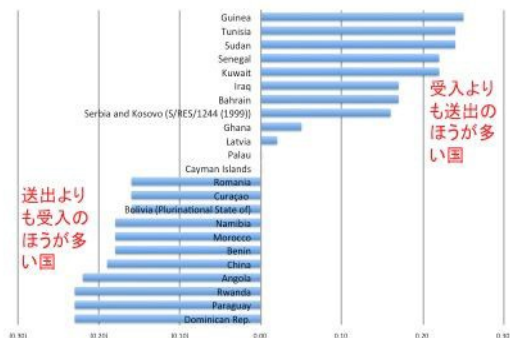


図 1

とができ、そのため本研究の対象を難民政策に絞っていった。その結果、明らかになったことは、途上国において難民受入を可能としているのは実は、ホストコミュニティ支援という形で先進国から供与されている ODA であり、南南協力と ODA とが共存するという姿であった。ここから明らかになった構造は、ODA と南南協力との排他的な競合関係ではなく、むしろ互いに補完しあう関係である。

アフリカやアジアの複数の国々における現地調査を通じて、難民受入国の政府やホストコミュニティが抱える難民を受け入れることの「合理性」を描くことができた。その様子は「ODA は難民を救えるか？」という論考として、パブリッシュされたものである。

難民受入を南南の一形態として捉えれば、図 2 に示すように対外援助という形での国際貢献はしないけれども、別の形での貢献を行う途上国が存在することが浮かびあがってくる。

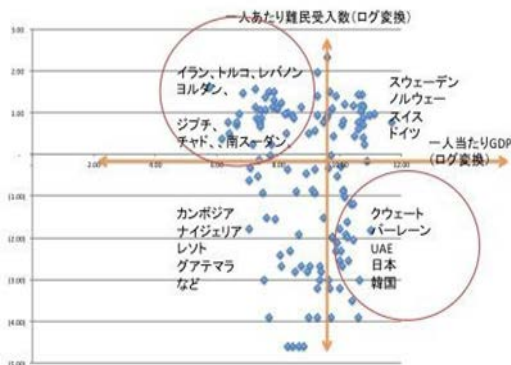


図 2

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① 小林 誉明、ODA は難民を救えるか：グローバルな人口移動時代における国際貢献の構図、東洋文化、査読有、Vol. 97、2017、pp. 99-116

② 近藤 久洋、人道主義は普遍的か—新興国と国際人道レジームの未来—、東洋文化、査読有、Vol. 97、pp. 47-74

③ Hisahiro Kondoh, Convergence of Aid Models in Emerging Donors? Learning Processes, Norms and Identities, and Recipients, JICA-RI Working Paper, pp. 1-58

[学会発表] (計 4 件)

① 近藤 久洋、新興ドナーの人道主義比較、日本比較政治学会 2016 年度研究大会、京都、2016 年 06 月 25 日

② 小林 誉明、ネパール大地震をいかに分析するか? 社会学者の役割、国際開発学会横浜支部報告、横浜、2015 年 10 月 29 日

③ 小林 誉明、経済発展のメカニズムと政策・支援、国際開発学会 2015 年度春期大会、東京、2015 年 06 月 07 日

④ 小林 誉明、開発援助における官民パートナーシップの多様性—新興国の事例が示す可能性—、国際開発学会 2015 年度春期大会、東京、2015 年 06 月 07 日

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 誉明 (KOBAYASHI, TAKAAKI)
横浜国立大学・大学院国際社会科学研究
院・准教授
研究者番号：00384165

(2) 研究分担者

近藤 久洋 (KONDOH, HISAHIRO)
埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号：20385959

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし